

## ＜＜アンケート調査の結果との比較＞＞

【図3】

『平塚市「地域での福祉活動」についての住民実態調査』

実施時期 平成13年7月

実施方式 無作為抽出による郵送方式、標本数3020、回収率50.6%

実施結果（抜粋）から・・・

ボランティアへの参加意向

「是非参加してみたい」8.3%と「機会があれば参加してみたい」55.8%

参加してみたい活動領域は、「社会福祉に関する活動」が47.3%

日常生活をする上で困ったときに誰に「手助け」を頼むか、対象別意向

隣や近所

「頼みたいが抵抗感がある」27.1%と「頼みたくない」28.2%

自治会や地区社会福祉協議会

「頼みたいが抵抗感がある」32.9%と「頼みたくない」26.3%

近くのボランティア団体

「頼みたいが抵抗感がある」34.1%と「頼みたくない」24.0%

なぜ頼みたくないかの理由の第1位は、他人に頼らずに、自分や家族でなんとかしたい。

こうした傾向から推測されること・・・

『地域での福祉活動への参加意欲は高く助けたいという人は多いが、逆に、地域へ気軽に助けを求める人は少ないという、ギャップがうかがわれる。(平塚市地域福祉推進モデル事業報告書から)』

しかし、そのギャップの原因まではわからない・・・？？？

仮説をたてなければ、調査票式のアンケート調査は行えない。  
こうした原因の推測や生活課題そのものなど、複数の要因が相互作用することが推測される事項はアンケート調査に不向き。

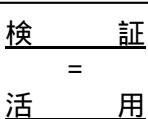
**ワーキンググループの逐語記録を分析する意義**

市民が直接議論を深める過程から、これまで把握できなかった情報が得られる。

様々な要因の階層性や相互関係も含めて情報が得られる。

市民活動など主体的解決策に結びつきやすい情報が得られる。

市民とのパートナーシップを前提に行政の役割が明確にしやすい・・・など



策定委員会への課題提示

より実態に踏み込んだ調査設計・・・